



皮膚科医よ！ 学校に行こう！

岡村理栄子
岡村皮膚科医院院長

先日、97歳の母が亡くなった。母は東京女子医科大学の昭和20年卒で耳鼻咽喉科医であったが、当時は戦後間もなくであり、医師全体、とくに男性の医師がまだ戦地から戻らず不足であった。そのために母は開業医として地域医療、学校保健にと忙しく働いていた。医師になった私には、自分が繰り上げ卒業であったために技術的にとても不安だったことから「卒後の勉強が大切である」、また「学生するとき、疎開児童の慰問に大学から派遣された。子どもたちに医学的には何もしゃあげられなかったが、子どもたちはたいへん喜んでくれて東京の話をして遊んだりした。」と、戦後何年も経ったがそんな話をしていた。

それが母の医師としての基であったのか、その後、小中学校はもちろん、聾啞・盲学校、養護施設の学校医などを何十年も勤めた。責任感の強い医師であり校医として接した多くの子どもたちに慕われ、街に出れば「女医先生！」と声をかけられたものだった。

母の影響もあり、私も2000年から日本臨床皮膚科医会の学校保健委員を長く務めさせていただいた。この委員会は有意義な会であり、いまでも素晴らしい実績を上げている。

学校保健全体の傾向として、最近の子供たちの生活環境の急速な変化に対応しようとしている。この委員会では、学校医の仕事が単に「子どもたち

が学校にいるときに安全で、健康で、病気が人に感染しないようにする」のでなく、「子どもたちが生涯にわたり自分の健康について考えるようになるための知識を与える」ことが必要と考え、またその仕事の割合が増えてきていることを真剣に受け止めている。

そのために、いままで委員会は「皮膚科専門医のための健康教育用教材」を学校での講演会に使えるように制作してきた。「アトピー性皮膚炎」「おしゃれ障害」「学校における感染症」「中高生に必要な性感染症の知識」等についての教材で、新たに「足育」のCDも現在制作している。現在、高齢者の足の障害が多いが、それを小学校時代からの注意で防ごうという大きなプロジェクトである。

さて、私は現在、東京都小金井市の教育委員を7年間務めている。学校全体について医師として教育委員会に参加しており、学校に行くことが多い。そしていまでも、20年前に学校に講演に初めて行ったときのことを忘れられずにいる。養護教諭も教諭も、皮膚科の医師に聞きたいことが多くあった。それを実際に学校に行き、初めて知った。

地域に溶け込み医師として働くには学校に行き、いまの子どもたちに何が必要かを知ること、そしてより多く足を運ぶことが大切と考える。そしてそれを皮膚科医の皆と共有したいと考えている。